

い症状を有する例であっても、治療が適切であれば、1〜2週間で軽快し、ほぼ並行して内視鏡所見も改善する。したがって、予後は良好である。

文献

- 1) 胃炎研究会「軽井沢胃炎分類実行委員会」(矢花剛・他):胃炎の分類,胃炎研究会試案, Ther Res 14: 2240, 1993
- 2) 寺野 彰・他:胃炎, 内科 65: 1056-1059, 1990
- 3) 矢花 剛・他:胃炎, 内科 67: 1119-1125, 1991

書評

川井 啓市 編/井口 秀人・清水 誠治 編集協力

胃一形態とその機能 第2版

武藤 輝一 (新潟大学学長)

この度、川井啓市先生ほかの方々の編集・執筆による著書「胃一形態とその機能(第2版)」が上梓の運びとなった。第1版から役立つ参考書として利用させていただいたが、もう20年近くたったので、改版されたらどうかと思っていたところへの第2版の出版である。早速、拝読させていただいた。

本書第2版にはいくつかの特徴がある。第1版では内容の一貫性を重視した結果、内容は優れていたが、執筆者が限られていた。しかし、第2版では、著しく進歩したこの分野の知識を十分に盛り込むため、日本全国の各分野の第一人者の方々が執筆されている。その結果、胃の形態と機能に関する辞典にも等しい、豊富で、かつ新しい内容が記載されている。次に“胃一形態とその機能”の表題に合致するように、第1版からの主旨を貫き、胃および胃に関連する十二指腸の形態と機能のみに焦点を絞り、胆道・脾に関連する十二指腸の形態と機能については割愛されているので、本書の目的が明かで、大変理解しやすい。

内容は5つの章に分かれ、第I章では胃・十二指腸の発生、マクロとミクロでの形態、血管構築、神経支配のほか、細胞の構成要素とその動態、免疫機構、加齢の変化、第II章では細胞や胃腺レベルでの機能、胃液分泌や運動機能、第III章ではストレスと粘膜防御機構との関連、第IV章では現在大きな関心が寄せられている *Helicobacter pylori* と疾患との関連などについて記述され、最後に第V章の中で、胃・

十二指腸疾患の概要が病理生理を中心に述べられている。

これらの内容の重点は、①胃・十二指腸の形態と機能を中心に、臨床医も知っていなければならないたくさんの基礎的かつ新しい知見の掲載、②形態と機能は各種病態下でいかに変化するか、その理解を容易にすること、③各種胃・十二指腸疾患の診断と治療に当たり、形態と機能に関する基礎的知識を整理しておくこと、などにあるように思われる。

本書の内容からみて、胃・十二指腸疾患に関心を持つ基礎医学者の方々のお役に立つことは申すまでもない。そして日常、消化器疾患の診断と治療に携わるベテランの消化器内科医や消化器外科医にとっては、多忙な毎日の中で、胃・十二指腸疾患の病態生理に関する知見を整理し、これを診断と治療に役立たせるために恰好な成書といえよう。さらに消化器内科や消化器外科で研修する若い医師の人たちにとっては、日常遭遇することの多い胃・十二指腸疾患を形態と機能を中心とする病態生理の立場から理解するために、極めて有用な参考書になるものと思っている。

本書第2版が、臨床と基礎の両面において、胃・十二指腸の形態と機能そのものについて、また胃・十二指腸疾患の診断と治療について、関心を持つ人たちによって大いに活用されることに期待したい。また、それが本書出版の狙いであろうと思われる。

(B5判 368頁 21,630円(税込) 1994年 医学書院刊)